

地域活動の現場から 関心が高まっています 地産地消

●地産地消が地域に根付いてきました

地元で生産されたものを地元で消費しよう。消費者の食に対する安全・安心志向の高まりやとれたての新鮮な食材への興味の高まりを背景に、市内でも農産物直売所やレストラン、学校給食などさまざまな分野で地産地消への取り組みが見られます。

●講演会を開催！ 地産地消への理解を深めました

このたび、上町すみれ会では、地産地消の推進活動に精力的に取り組んでいる『JA秋田やまもと』の泉牧子さんと『地産地消を進める会』の谷口篤子さんを講師に招き、講演会を開催しました。泉さんは、一部の輸入食材の危険性を指摘しながら「食の安全性を確保するには生産者と消費者の距離を縮めること（お互いが顔の見える関係を築くこと）がなにより大切」と述べ、谷口さんは「野菜を農家から直接、取り寄せることにより、単に生産者と消費者の関係を越えた農家との人間的な交流が生まれた」という自らの体験を元に、消費者の側から生産者を理解しようとすることの意義を述べられました。



質疑応答では、活発な意見交換が行われました

講演会に参加した参加者からは「たいへん勉強になった。自分にできることから始めてみたい」との声が聞かれ、地産地消への理解を深めることにつながりました。



チーム全員一丸となって

2月5日(日)、総合体育館で能代市ドッジボール大会が開催されました。子どもから大人まで参加した大勢の人が、小学生・一般・一般女子それぞれの部で、熱戦を繰り広げました。

いつも元気



活き活き向ヶ丘テント村

親交もあったようです。荒々しい男鹿石に豪快に書いたこの碑は、堂々として、美しくあります。(古内)



この句を選んだのは五空でした。大正十五年の建碑ですから五空も体力に自信がなくなってきたころです。そういう五空の心境が表れています。建碑したのは鈴木香雪で、能代詩星会の岸部千之・佐山仙光・平川豊秋の名が刻まれています。この詩星会の人たちはどちらかという旧派に属するようですが、日本派の五空との親交もあったようです。荒々しい男鹿石に豪快に書いたこの碑は、堂々として、美しくあります。(古内)

と読めます。原句は「草臥れて 宿かる頃や 藤の花」です。芭蕉が貞享四年(一六八七)十月から翌年四月まで上方を旅したときの句を集めたものです。旅には、紙に渋を塗った防寒用の衣類、硯や筆、昼弁当などを背負って行きます。四十四、五歳ころの芭蕉ですが、足も弱って思うように道が進まないと嘆いて詠んだ句のようです。健脚をもって多くの紀行文を書いた芭蕉ですが、このように弱音を吐くこともあったのでしよう。

句碑(二) 「松尾芭蕉」(八幡神社)

のーろ道遙
歴史と民俗のあいだ